

## あとがき

私はその昔、遺書を書いたことがある。事情はこうだ。第二次世界大戦末期、沖縄はアメリカ軍の手中に陥り、本土は空襲によって焼土と化した。いつアメリカ軍が本土に上陸するかは時間の問題と聞いていた。そのさ中、中学4年（旧制）の私は、担任からつぎのような課題を提出するよう求められた。

「アメリカ軍は渥美半島に上陸すると想定せよ。その時君たちは戦車に向かい、爆薬を仕掛けるのだ。ついては君たちの両親に、死を覚悟した最後のことばを書け」というのである。

私はこのことをすっかり忘れていたが、偶然のことから、クラス全員のそれがでてきた。私は驚きかつ愕然とした。文体は漢字（もちろん旧字）片仮名混じり文で、楷書で丁寧に綴られていた。級友のそれも「一億一心」のスローガンに洗脳されていて、個人の感情など微塵もなく、全く判で押したような作文であった。

やがて敗戦。少年の目にも外国支配の現実を見せつけられると、この歴史のよって来たところを知りたいという気持ちが膨らんだ。それから、ヨーロッパの歴史や思想また芸術に心を寄せることとなった。たまたま文化社会学者森東吾先生（大阪大学名誉教授、故人）の教えを受けるに至ってから、この想いはますます強くなった。

教職についてからは学校教育臨床に関心をもち、当時、高等学校が直面していた喫緊の課題の調査や分析、その対策などにかかわることになった。『高校生とオートバイ』（私家版、1988）、『中・高校生の自殺予

防』（東山書房，1986），『欠席の研究』（ほんの森出版，1995）などはその中で生まれた。

その後、日本自殺予防学会、日本学校教育相談学会、日本電話相談学会の創設と運営にかかわり、それぞれの機関誌に小論を載せた。このうち最後に取り組んだのは電話相談であり、その一端をここに蒐めた。この領域の研究は、未開拓で研究者の層も薄い。その技法的側面については臨床心理学の知見は極めて有用であったが、社会的・文化的側面についての考察は充分ではなかった。本書は黒電話からケータイ時代までを視野におき、電話（相談）の現象を社会変動の中で捉えようと試みた。終章を「アジールとしての電話相談」としたのは、こんな想いからである。電話相談活動の充実には、まずはなによりも電話相談の基本にたちかえることであり、直面している実際的な問題を再吟味することである。

本書をまとめるにあたり、日本電話相談学会を中心とする研究、日本のちの電話連盟の実践、またささやかながら、地域における集まりである愛知電話相談ネットワークの活動から多くを学んだ。関係者にお礼を申し上げる。なお原稿作成から編集・校正に至るまで、ネットワーク会員の森咲子氏の援助を得た。

かつて学生のレポートの中に、はしがきとあるべきところを、はじかきとしたものがあり苦笑したことがあった。そのことば通り、内容はお粗末なものであった。しかし考えてみると、これもことによると粋なジョークかもしれない？…。やはりミスプリントと判断した。人のことと笑ってはおられない。思わぬ誤りや誤解、また舌足らずの表現があるやも知れず、ご指摘をいただきたい。私事にわたったあとがきになったが、本書成立の一端を記した。

ほんの森出版の小林敏史氏には、編集者として細部にわたって助言をいただいた。記してお礼を申し上げる。

平成22年10月

著 者